内郷村報

天ニ法ルベシ　人ハ則チ順ナ

滅私奉公の精神を以て新政治體制を結成せよ

大内民惠

一、緒言

回顧すれば十年の昔となつた。昭和六年五月一日發行、本紙第十號の紙上に「斯くあられねばならぬ選擧革新案　我國空前の試み」の一文を掲載して、侃々諤々、當時に於ける各政黨の腐敗墮落を、徹底的に檢討批判して、其覺醒振奮すべきを諍告すると同時に、各政黨政派並に縣議立候補者の面々に對して、公開狀を發送し、同年九月行はれた、其選擧に際しては私費を以て「政見聽聞會」なるものを創催、候補者全部を招聘して其政見を發表させ、以て選擧の眞義を闡明し、選擧の肅正革新を行ひ次いで昭和七年の衆議選擧に際しても、同樣の方法を以て所信を實行、其都度其記事を掲載したる、本紙數千枚を增刷して、政府當局各政黨本部は勿論、全國の關係者にも發送して、其指導啓發に努めたのであつた。

而して予の此運動は、松岡洋右氏の政黨解消論や、政府當局の「選擧肅正運動」等の、先蹤をなすこと實に數年前であつた。

爾來各政黨は、予の豫言の如く一路衰運を辿り、氣息奄々、餓鬼的生存を餘儀なくせられて、今日に至つたのである。

然るに時しもあれ、帝國議會有の時局は展開せられ、こゝの處どうあつても、徹底的に擧國一致、之に對應せざるべからざる運命を招來し、近衛公によつて「新政治體制」結成を、提唱せらるゝに立到つたことは、帝國の前途、世界の將來の爲に、眞に慶賀に堪へない現象である。而して從來犬猿摩擦の關係にあつた、大小政派、各種團體の群衆が、此時を逸してはとばかりに、晏越同舟、赤白同車其舟車に乘り後れざらんと、立驅ぐ形勢となつたことは、後れたりと雖も、之亦洵に結構な次第であると、予は衷心から滿足に思ふのである。

二、過去二十年

予は海外に十余年を送り、歸朝後當地方に居を構へてから二十年になつた。其前半十年間に於て、予は久方振りに當面した、なつかしき我母國の姿を、あらゆる角度から調査し研究し、其「如是我觀」「如是我願」を、絕對他の介入を許さざる、予の小機關紙たる、この「内郷村報」紙上に掲載して三千方至一萬（問題によつて）を發行、全國は勿論、世界各地の知友並に論評したる問題の各關係者に之を頒布して、「如是我願」即ち予が理想金願を發表すると共に、之が實現に贊同協力を仰いて來たのである。

其後半十年間に於て、予は幾度か村議、縣議、衆議に立候補すべく慫慂せられ、且つ選擧費の提供を申出でられたことも、一再ではなかつたが、予は其都度其厚意を謝すると共に、肅正を缺く選擧によつて、腐敗せる政界に出馬する迄は、墮落しないといふ理由の下に、之を斷つて來たのである。同時に予の清き一票を、清からざる候補者に捨ることは、陛下に對し奉りて、恐懼に堪へぬといふ見解の下に、心ならずも棄權を一貫して今日に至つたのである。之は世間周知の事と思ふ。

三、予の今後

近衛公の提唱せらるゝ「新政治體制」！其内容方策等に就いてはまだ之を知る能はないが、時局突破の爲に、全國民を打つて一丸とし、纏めて一致するといふ大方針は、明かに之を看取することが出來る。

こゝに於て全國民は、千載一遇の好機、須らく日本精神の根幹、「萬有は天地の公道に歸す」「蒼來の陋習を破り天地の公道に基くべし」「教育勅語の聖旨」に基いて、擧國一體、官民一途、東亞新秩序建設將た世界平和顯現達成の爲に、捨てなき大和島根を犧牲として、滿洲たる太平洋上に、活躍奮鬪せざるべからざる、使命を科せられたのである。立てよ一億同胞！の感を深うするものである。

予は以上の理由の下に、年來の政界不介入主義を撤排して、早晩出現し來るべき「新政治體制」の結成に、率先參加、滅私奉公する覺悟である。

予は幸ひに過去十年間に於て、縣下方面委員、同選擧肅正委員、同國民精動參與等の席末に列し、縣下あらゆる方面の人士と、接觸する機會が多かつたので、今後此等の人々の驥尾否驥尾に立つて、予の所謂「觀願主義」を傾倒して其至誠を致すべく決心したのである。それに予は最近、民間よりあげられて、本縣海外協會常務理事として、月の内半分は、縣廳内に執務しつゝある關係上、以上の決心遂行には、またとなき便益を有することゝ信ずる。

四、予の政見

以上決心覺悟を發表したる予は其責任として、政見の概要を左に列記しておく。

一、教育制度を徹底的に改革して國民に確乎たる信念をもたしむる事。最近發表せられた、教育審議會立案の如きは、眞の「教育」に徹せざる皮相の改正案である

―拙著教育制度改革概論參照―

二、國民の人生觀宗教觀を確立する事。先年當局が招集したる全國の宗教家は、如何なる研究對策を講じたるか、更に其結末結果を聞かず。但し予には三十年來體驗研鑽、現代人を首肯歸依せしむるに足る、或信念を有して居る。

三、全國力を徹底的に充實して國際の平等化を期する事。我國力の充實は未だし、又世界の各地に於て、我物資我國民が、排貨排斥を受けつゝある現狀の打破は刻下の急務である。

四、海外に於ける第二世補導に關する問題。海外にある百萬同胞の、第二世第三世を補導して、天地の公道たる、日本精神を體得せしむることは、世界の平和、人類の幸福を招來する根元となるものであつて、一面我民間外交ともなるべき、重要なる問題たるにも關はらず、從來我國に於ては、之を閑却してある。予は既に二十余年前に於て、此運動に着手し、現に之を繼續しつゝあるのである。

五、猶太力の處置問題。世界各地に散居して、「金」の力割を所有、隱見出沒、其大魔力を發揮して居る、猶太人を如何に處置すべきは、人類の平和上、解決を要する一大問題である。予は二十年來之に深き關心を以て、其動きを凝視して居ると同時に、其對策を考慮しつゝあるのである。

六、社會事業の强化擴大。我國現在の社會事業は、一言之を評せば、「微溫湯」を飲んで居る樣な感がする。之に清涼味を加へ、水準以下の同胞に活を入れて、積極的に役立たせる方策を講ずることは、刻下の急務である。

以上は予の政見の一端であつて之に關する予の研究と理想とは、予の著書本紙及其他に於て、既に之を公表し、相當の贊同者を出して居るのである。

五、結語

貧しも借りも貯蓄だもなき我なれど使ふ金には不自由もなし

林子平は六無の歌を唱へたが、予は仕合せにも妻子眷族何れも健在、目下の處でば以上四無の生活に滿足して居る。但し入つては、勞働者の寄宿舍にあつて彼等と寢食を共にし、出てゝは汽車は三等東京では「禁酒ホテル」といふ安宿、福島では姉の家の二階に陣取

―二面へ續く―

内郷村報の六大使命

一、政黨政派を超越して、村人飛躍主義を標榜す。
二、村内公私各機關の宿務狀況を報導し供せて其協調を計り、以て利益勢力の實現を期す。
三、各村社會事業の徹底を期す。
四、村内の諸事業を調査研究し、其結果を發表す。
五、本村の産業經濟を研究し、其結果を發表す。
六、倫理力を以て、國民善導に當る

本紙發行趣旨内郷の家族にも、其他の縁故者にも、國民善導の目的を以て發行す

毎月一回十五日發行

本紙定價一部金五錢一ヶ年實費共金四十八錢
發行所　福島縣石城郡内郷村宮字宮殿二
内郷村報社
編輯兼發行人　大内民惠
印刷所　福島縣平市一丁目二九
平活版所

央の「方面時報」及本縣の「社會事業月報」に掲載せられ、各方面委員各位に、配付せられてあるので、之を抄略し、此行に於ける予の見聞感想の一端丈を、記述して

二時建國會館に全員着席、感謝祭宣揚式、方面事業功勞者の表彰（本縣では五十嵐忠藏、太田貞喜の兩氏）優良方面選奬（本縣では白河共濟會）等ありて、協議總會を

慰問す。歡談不盡、漸く辭して新潟に向ひ、村松分院に到り、同樣各勇士の參集を煩はして、慰問の使命を果す。何れも滿足して別れを惜まる。それより新潟市へ出て

—一面より續く—

つて、大小風呂敷を展開し、其行動に要する資金は、內外より集る純なる獻金で事足つて居るのである。されば世の所謂富貴も威武も予にあつては敢て憚る處はなく、例の「觀顧主義」を振りまはして之に對するのである。

若し予の主張にして、天法人則に將た天地の公道に、そぐはざるを發見する時に於ては、神佛ならぬ平凡なる予は、虛心坦懷之を撤回して、他に聽從する襟度丈は之を有して居る考である。

先以て讀者諸君！兎にも角にもお手々つないで、「新政治體制」を結成しやうではないか。

最後に一言を添加しておくが、以上を讀まれた人々の中には、「大內もいよ〳〵衆議院に乘り出す氣になつたナ」と早合點する向も尠に之れあるこそと思ふが、予の心境は

賴まなば米搗きもせん我なれごあたまをさげてお願はせず

で、たゞ忠實なる一黨員として、只管に予の政見の實現運動に、沒頭する考なのである。

(七月十四日稿)

摸擬動員

帝國在鄕軍人會內鄕村分會長 大橋貞勝

昭和十五年七月七日は、皇紀貳千六百年の支那事變勃發三週年記念日である。此光輝ある年に、盟邦ドイツは電擊作戰によつて、佛に致命症を與へ、自由主義國家の强豪大英帝國の崩潰も、今や時日の問題となつた。然るに事變は三週年を迎へ、抗日政權未だ潰滅せざるに、國內の情勢は、動もすれば、皇軍の連勝に慣れ、精神の弛緩を招ぎ、或は三年にして既に戰爭に倦み、或は經濟の壓迫を喞ち思想の動搖を來さんとす。あゝ危べき哉、國を亡ぼすものは、外患にあらずして內憂か。興亞の聖業の障害物は、吾等の同胞の中に存在せるが如し。

緊褌一番、戰時體勢の體現こそ、焦眉の問題でなければならない。然り分會は「國難突破の核心である」吾等は國難突破の核心として、此深刻なる時艱に處し事變處理の嚮導を承はり、村民三萬五千の推進力となり、以て時艱克服、聖業完遂に邁進せねばならぬとの確信をもつものである。

此目的を達するために、福島聯隊區司令部より、指導官山田大尉殿の臨場を仰ぎ、沼田村長、村會議員、金澤助役、瓜生部長、菅波兵事主任等の參列を得て、午前八時高坂小學校に於て摸擬動員を決行した。環境的に見ての冒險も、大成功裡に午後四時半無事終了、所期の目的を達せることを會員と共に祝福するものである。

令狀發行、三八三。參加三三三。事故不參、五九。(轉出病氣等の爲)

此中には、海軍部より自發的に、三十六歲以下の部員十四名と、未入會參加者九名の出場あり、時局の認識に對して、滿腔の感謝を捧げるものである。而して當日の行事概況は左の通りである。

—第一會場—校庭

一、整列。二、分會長挨拶三、勅語奉讀(分會長)支那事變一週年に賜はりたる勅語、紀元節に賜はりたる勅語。四、服裝檢査(小隊長)五、教練、大行進、突擊(分隊長、小隊長)六、閱兵 山田大尉に對し(小隊毎に)七、分列、同上。八、銃劍術試合。九、沼田村長殿の挨拶。一〇、講評(分會長)一一、訓示(山田大尉殿)1講評 分會長と同感なり、細部は之を略す。2發令三八三中三三三の參加は、半以上の成功といふべし。殊に海軍部員及未入會者の自發的參加を激賞する。終了十一時四十五分。

—第二會場—講堂

一、開會の辭(午後一時 山部副長)二、國家齋唱。三、默禱(出征將兵武運長久、戰歿將兵感謝)四、勅諭勅語の奉讀(分會長)五、講演。(荻洲部隊叙洲殲滅戰の經過と銃後國民の覺悟、山田大尉殿)六、會歌齋唱。七、萬歲三唱。

以上諸般の行事は、鄕軍分會の眞面目を發揮し、緊張と全力傾到の中に、しかも圓滑に進行した。殊に山田大尉殿の講演は、荻洲部隊付として、轉戰二ケ年の實戰談で、生々しい實相が展開され、聞くものをして襟を正さしめ、感奮興起せしむるものあり。木下藤吉郞の崇拜家であり、軍神大越中佐の研究者である大尉殿は、四百余名の全聽講者を感激せしめた。厚く御禮を申上げる次第である。終つて分會參事里見君を、模範役員として賞揚せられた。次いて分會長立ちて、昭和十五年度の事業を、八項目に別けて說明し、引き續き皇紀貳千六百年の紀念事業として、忠魂碑建設問題を勤勞奉仕によるか、獻金によるかを諮り、滿場一致獻金による事に決定して、午後四時三十分に散會した。

摸擬動員は、第一回は昭和九年二回目、第一回分會設立以來杉山分會長時代に實施せる、も、其後會員顏觸一新、歸還兵、負傷兵、未入營補充兵等の複雜多種、大內鄕の行事としては、難色ある事業であつて、其成行を案じたるも、敍上の如く分會の勢揃ひは見事に成功した。

軍人大越中佐出身のこの榮譽を、將來に傳統し、大越魂の昂揚具現を念願して擱筆する。

戰線の市川君と銃後の草野局長

白水出身にして、出征滿二年、赫々たる軍功を立て目下揚子江の某所にあつて重要任務に就いて居る、市川定吉君が、銃後にあつて事變の當初より、同大字中より出征せる多數の將兵に對して、音信は勿論、我內鄕村報を每號贈呈して、之が慰問に努めて居つた、草野白水郵便局長に宛てゝ、數々の從軍中の經過報告に、屢々の寫眞を添へて、感謝狀を寄せられたのであつたが、此程同局長より、其全部を本社に示されたのであつたが、記者は之を「戰線銃後の双美」として、衷心より感激させられた。唯紙面狹小其全文をこゝに紹介し得ないのを遺憾とする。

(市川君)

◎本紙賛助金寄贈芳名

金五拾錢	內鄕	岩崎義美
金五圓	本宮	渡邊貞藏
金貳圓	平	大嶺庫
金拾圓	東京	筒井磐雄
金貳圓	三春	齋藤榮一
金五圓	內鄕	草野三千雄

服部宇之吉序 矢野恒太 大內民惡著

教育制度改革概論

(四六版二一一頁 定價五十錢 送六錢)

行き詰れる現代の教育制度を解剖して、學理と實際と、歷史と實驗とから新に大內案九主義を提唱す。天下知名の士の贊同殺到に違あらず。されど未だ一人の批難者も現はれず。

我國教育學界の權威 前京大總長小西重直博士 書を寄せて曰く、多年ノ御體驗ト實地ノ御試驗ニ基ク眞摯懇切ノ大論動ナ拜讀仕リ不堪感激ニ存ジ候云々。

發行所 日本評論社 東京京橋三丁目

取次所 內鄕村報社

銃後の守り

方面委員 田口淳三

予の受持大字高坂の菅野

てこそ、彈雨の中に敢然と

省京山縣羅家台に於て戰死

大字宮字平太郎 陸軍騎兵伍長 海藤正義

昭和十二年九月應召出征

新縣×鳩嶺に於て戰死。

大字白水字入山 陸軍工兵上等兵 竹內三郎

昭和十二年十月應召出征

公日に、副食物を節約して其分を竹筒の中に貯金して居たるが、去る七日の事變三週年紀念日をトして、其

銃後の守り

方面委員　田口淳三

予の受持大字高坂の菅野喜代治君は、補充兵として昭和十二年十月應召勇躍征途に就き、爾來今日に至る迄各地に轉戰し、一意君國の爲に苦闘を續けつゝあり留守宅には養父國藏さん（六六）の外、養母と妻君と三人暮しで、シッカリと家を守つて居る。家族は何れも壯健で、日々農業を營んで居る。喜代治君の應召前は、田八反歩（自作小作）を耕作して居つたが、「銃後が第一だ、後顧の憂ひがなければ、戰地にあつても存分働けるだらう」と昨年は田一反歩を増し、本年は更に又一反歩を増し、一家三人揃つて耕作に從事し、元氣一杯全幅の力を傾注して「出征中は世間の皆様に御厄介にならぬ様、養子には二度と出來ない、名譽ある御奉公を、完全に果す様に」との一念に燃え、日に夜をついで働き、其殊勝なる行動には、隣人を感激させて居る。最近予は「内地の常に變らぬゆつたりと、のび〳〵した生活を見つめてこそ、私達は何の憂ひもなく安心して戰ひ、そうした大きな精神的據所があつてこそ、彈雨の中に敢然として飛び込んで行ける云々」といふ、さる新聞記事を讀むに及んで、一層國藏翁一家の奮闘振り、嚴然として銃後の守りを堅めて居らるゝ模範的の行動に、滿腔の敬意を表しつゝ、此一章を草したのである。

村葬

五月二十六日第二小學校に於て、盛大莊嚴裡に村葬を擧行せられた、戰歿九勇士の氏名略歴は左の通りである。

大字宮竹之内
陸軍歩兵伍長　村上　明
（田村郡小野新町）
昭和十二年十月應召出征
同十四年十二月二十二日湖北省京山縣に於て戰死。

大字御台境字前田
陸軍歩兵伍長　星　良一
（田村郡夏井村）
昭和十三年九月應召出征
同十四年十二月三十日江西省奉新縣猪閑山に於て戰死

大字白水字川平
陸軍歩兵伍長　佐藤　源信
（石城郡夏井村）
昭和十三年九月應召出征
同十四年十二月二十日湖北省京山縣羅家台に於て戰死

大字宮字平太郎
陸軍騎兵伍長　海藤　正義
昭和十二年九月應召出征
同十四年十月十三日湖北省京山縣新街附近に於て戰死

大字小鳥字川崎
陸軍歩兵上等兵　樋口　武雄
（本村大字御厩）
昭和十三年八月應召出征
同十五年一月十三日湖北省

大字綴字七反田
陸軍歩兵上等兵　渡邊　賢司
昭和十四年八月應召出征
同十四年十二月四日江西省

大字綴字一之坪
陸軍歩兵上等兵　渡邊　昇
昭和十三年九月應召出征
同十四年十二月二十二日湖北省京山縣王五台に於て戰死。

大字白水字高倉樽
陸軍工兵上等兵　竹内　三郎
昭和十二年十月應召出征
同十四年五月召集解除となりて歸郷、同年八月九日自宅に於て死亡。

大字高坂字御殿
陸軍工兵一等兵　弘光　重敏
（東京下谷金杉）
昭和十二年九月應召出征
同十四年二月召集解除となり歸郷、同十五年二月十五日宮城縣亘理郡傷痍軍人療養所に於て死亡。

戰死公報

此程、宮峯根小林常雄君は五月二十日に、高坂御殿鈴木清吉君は五月二十五日に、何れも名譽の戰死を遂げたる旨、其筋より公報があつた。

特志の數々

▽戰線にある白水字高倉樽石勇助氏は、白水分教場へ金拾圓を寄附。
▽島田兼吉氏は、愛國婦人會内郷分會へ、金參拾圓を寄附。
▽小林組代理須賀亀太郎氏は、内郷村銃後奉公會へ、金貳拾圓を寄附。
▽方面委員田口淳三氏夫人つや子女史は、毎月興亞奉公日に、副食物を節約して其分を竹筒の中に貯金して居たるが、去る七日の事變三週年紀念日を卜して、其筒を割つて見たところ、四圓にも達して居つたので、それに一圓を加へて五圓として、軍事郵便機献納基金中に寄附したる由。

磐炭　教育浪曲會

磐炭に於ては、明十六日午後一時より、淺野記念館に於て、文部省勤勞者教育中央會派遣講師山川八道氏の浪曲會を開催、親和會役付並勞務職員其他多數を慰安する由。因みに演題は、小川高保軍國美談「遺骨の入營」。「玉川水道建設の功勞者」の二題の由。

半島勞務者　規律訓練

磐炭に於ては、六月二十三日の公休日より之を開始（約一時間）して、規律、協同、服從等の精神を涵養したる其結果良好なるを以て、一段と之が研究と改良とを行ひ、訓練の徹底を期する方針の由。而して其場所は、小豆畑寄宿は内郷山神社、七年會及川口寄宿は金坂運動場、圓谷寄宿は御殿山神社、内藤寄宿は綴山神社に於て之を行ひ、其訓練事項は、遙拜、默禱、教練、遊戯等の由。

新縣×鳩嶺に於て戰死。

大字白水字入山
陸軍工兵上等兵　竹内　三郎
昭和十二年十月應召出征
同十四年五月召集解除となりて歸郷、同年八月九日自宅に於て死亡。

大字高坂字御殿
陸軍工兵一等兵　弘光　重敏
（東京下谷金杉）
昭和十二年九月應召出征
同十四年二月召集解除となり歸郷、同十五年二月十五日宮城縣亘理郡傷痍軍人療養所に於て死亡。

戰死公報

此程、宮峯根小林常雄君は五月二十日に、高坂御殿鈴木清吉君は五月二十五日に、何れも名譽の戰死を遂げたる旨、其筋より公報があつた。

特志の數々

▽戰線にある白水字高倉樽石勇助氏は、白水分教場へ金拾圓を寄附。
▽島田兼吉氏は、愛國婦人會内郷分會へ、金參拾圓を寄附。
▽小林組代理須賀亀太郎氏は、内郷村銃後奉公會へ、金貳拾圓を寄附。
▽方面委員田口淳三氏夫人つや子女史は、毎月興亞奉

我國教育學界の權威
前京大總長小西重直博士
寄を寄せて曰く、多年ノ御體驗ト實地ノ御試練ニ基ク眞摯至誠ノ大綜説ヲ拜誦仕リ不感感激ニ打タレ申候云々。

教育制度改革概論
（四六版二一一頁　定價五十錢　稅六錢）
麗澤學園　矢野恒太　大内民憲　著

行き詰れる現代の教育制度を解説して、學理と實際と、歴史と實驗とから新に大内案九主義を提唱す。天下知名の士の贊同枚擧に遑あらず。されど未だ一人の抗議者も現はれず。

諭勅語の奉讀（分會長）五、講演。（荻洲部隊叙洲）
殲滅戰の經過と銃後國民の覺悟、山田大尉殿）六、會

勢揃ひは見事に成功した。
軍人大越中佐出身のこの榮譽を、將來に傳統し、大越魂の昂揚具現を念願して

所期の目的を達せることを會員と共に祝福するものである。
令狀發行、三八三。參加

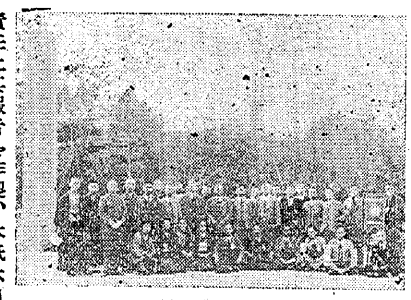
発行所　日本評論社　東京東京神田三丁目
販賣所　内郷村報社

全國方面委員大會　參列の記

石城郡方面委員聯合會長　大内民惠

一、緒言

五月二十一日より三日間、奈良に開催せられた、紀元二千六百年奉祝全國方面委員大會には、本聯合會代表として、正副會長三名が之に出席することに、決定したのであつたが、長瀬副會長は微恙の爲、田口副會長は夫人病氣の爲に予一人が其任を負はされる事になつたのである。而して予は二十日出發、其負はされた使命を果して二十四日に歸宅したのであつた。



本縣參列委員

責任上其報告を作製、本紙六月號に掲載する豫定であつたのであるが、六月號は二頁として、急を要する「精動運動」の記事丈を掲載して、之を發行したので、それが今月號に延びたのである。

されど其大會の概況は、既に中央の「方面時報」及本縣の「社會事業月報」に掲載せられ、各方面委員各位に、配付せられてあるので、之を抄略し、此行に於ける予の見聞感想の一端丈を、記述して其責を果すことゝした。

二、文化史展覽會

五月二十日午前五時綴喪、平の小野兄と同車、上野に着いたのは十時、特急「鷗」の東京發は午後一時なので、之れ好機と、單身上野の美術館に開會中なる、東朝主催の日本文化史展覽會に飛び込めば、偶然にも仕合せにも、斯道の權威たる舊知堀江榮太郎師に邂逅、相携へて十六部門を急いで一巡、其説明指導に預り、得る處多大、肇國二千六百年、其今日ある淵源を敬仰して、無量の感に打たれ、此國民として生れたる幸福と、又其責任とを痛感した。

三、亀山

零時半東京驛に駈け付け、小野兄と共に「鷗」に乘り込む。

我は鷗東海道を一飛に！

沿線の風光を賞しつゝ、「倫理講演集」と「海外移住」とを讀む名古屋と四日市で乘り換へ、小名濱の一行と一緒になり、午後九時少年の頃「仇打全集」で、お馴染になつた亀山に着き、驛前の坂本旅館に泊る。

四、大會第一日

早朝亀山を立つて、一先指定された高田町（奈良へ六里）辻甚旅館に至り、携帶品を置いて、橿原神宮外苑大天幕張の控所に馳せ參じ、二千余人打揃ふて參拜、午後二時建國會館に全員着席、慰靈祭宣揚式、方面事業功勞者の表彰（本縣では五十嵐忠藏、太田貞喜の兩氏）優良方面選奬（本縣では白河共濟會）等ありて、協議總會を開き、午後五時終了す。

五、記念撮影

本縣の出席者は、主事中山良男氏を筆頭に、左の三十六氏であつた。大會第一日の夕刻、神宮社標の左側に整列して記念撮影をなす

鈴木義三、國分傳次郎、松崎順平、渡邊芳太郎、氏家義興、鈴木七郎、田代廣治、山内左内、齋藤賢融、鈴木俊學、藤社大一、齋藤勳、松本祐夫、上野代收造、清水六七八、鈴木祥資、小野金太郎、大内民惠、五十嵐文俊、藤巻榮作、齋藤光雄、吉川重藏、石部ヤイ、伊藤ヤチ、尾形ムメ、進谷金之丞、佐藤泰然、鈴木默龍、熊谷源太郎、吉田勇司、堀田謙次郎、木村藤三郎、早川勇馬、五十嵐忠藏、林健次郎、庄司達治。順序不同。

記者の鹿よせ

六、祝賀懇親會

當日會後一同旅館に參集、懇親を兼ねて、五十嵐、太田兩先輩（太田氏不參につき田代委員代理）及白河共濟會の榮譽を祝賀するの共何れかに配屬して出席。予は第一特別部會に出席を命ぜられて居つたのであるが、こゝ數年引きつゞき特別部會にのみ出席して居つたので、之を辭退して研究部會第四部（奈良商業校）に出席した。全國委員（本縣は五十嵐文俊氏）

七、大會第一日

第一特別部會、第二特別部會、研究部會（四部に別る）を、市内各所に於て開會。本縣委員は全部共何れかに配屬して出席。予は第一特別部會に出席を命ぜられて居つたのであるが、こゝ數年引きつゞき特別部會にのみ出席して居つたので、之を辭退して研究部會第四部（奈良商業校）に出席した。全國委員（本縣は五十嵐文俊氏）の研究や取扱事例の發表は、何れも眞劍であり、有益なものゝみであつた。予は數年前東京の大會の時、ある研究部會に出席したる當時に比較して、數段進歩したるを見て大に滿足した事であつた。

八、高野山

會議終了後、單身人車をやとひて、二十年前曾遊の記憶を辿りつゝ、市内の名所舊蹟を一巡して、歸宿すべく奈良驛に到り、高野山に參るといふ、中山主事、田代御夫妻及鈴木七郎の四氏に會ひ、それでは予も亦同行することゝしそれより汽車、電車、ケーブルカー等々に運ばれて、指定宿の北室院に案内せられたのは、午後七時頃であつた。

弘法の敎へはいつこ高野山山と水とは清けかりけり

は參詣の結論だ。翌二十三日早朝奈良に引きかへして大會に出席す

九、大會第二日

第三小學校にて協議總會、各部長の報告、諮問協議兩事項を滿場一致可決し、山田孝雄博士の一國體の根本精神一を題する、徹底した有益な講演があつて閉會した。博士の講演こそは、我々にとつて何よりの收獲なり、お土産なりであつたと思ふ。

かくて予は、直ちに歸途につき途中名古屋に一泊して、二十四日早朝出發、一路歸宅したのであつた。

白衣勇士慰問

石城郡方面委員聯合會代表　遠藤喜三郎　花澤賢宥　赤土興榮　記

本部下出身たる傷病將士の慰問使を命ぜられた、我等一行三名は六月十五日　先づ仙台陸軍病院に到つた。慰問係の好意により、一室に白衣の勇士方の御參會を願つて、慰問の言葉を述べ、且其實戰談を拜聽し、次いで其席に臨み得なかつた各勇士方を、それ〴〵各病床に訪れて慰問し、辭して宮城野原分院に到り、こゝも一堂に御參會の取計ひにより、本院同樣の慰問をなし、引きかへして飯坂分院を訪れ、面會室に各勇士の參集を乞ふて、其使命を果し、夕刻辭して宿に就き、入浴休養す。

六月十六日　若松分院に到り、等しく一堂に勇士の參集をもとめて慰問す。歡談不盡、漸く辭して新潟に向ひ、村松分院に到り、同樣各勇士の參集を煩はして、慰問の使命を果す。何れも滿足して別れを惜まる。それより新潟市へ出て自動車を驅つて、市中を一巡、白山神社に詣でゝ、武運長久を祈り六月十七日　恙なく任務を果して各自歸宅す。

奇蹟的にも死一歩手前で、重傷を負はれた各勇士方の、頗る明朗元氣なるに感喜し、各自の盡きざる武勇談に、如何に奮戰苦闘せられたかを想像して一入感激し、且つは勇士方の時局認識、然も東亞新秩序建設たる、聖戰の目的に對する覺悟等、我等一行も覺えず自頭を熱くした。

今回の慰問に當り、各病院に於ける各係員各位の御配慮、殊に若松の白石軍醫少尉、村松の酒井軍曹兩氏の御厚意に對しては衷心より之を感謝し、白衣勇士諸君の一日も早く退院せられんことを念じつゝ、茲に其大要を記して御報告に代ゆる次第である。

内郷村報の六大使命

一、政策政綱を徹底して、村民大衆に浸透せしめ、以て挙村一致の体制を確立す。

二、村内公私各團體の活動狀況を調査し、併せて其指導を計り、銃後報國の實績を期す。

三、本村社會事業の徹底を期す。

四、村内の教育機關を整備し、風紀の粛正を期す。

五、本村は本村出身者及本村居住者との聯絡を計り、且其發展向上を期す。

六、尚餘力を以て、國民善導に當る

許さる、予の小機關紙たる、この「内郷村報」紙上に掲載して三千乃至一萬（問題によつて）を發行、全國は勿論、世界各地の知友並に識者に問題の各種條件に

予は以上の理由の下に、年來の政界不介入主義を撤排して、早晩出現し來るべき「新政治體制」の結成に、率先參加、滅私奉公する覺悟である。

毎月一回十五日發行

本部定價一部金五錢一ヶ年前拾錢金四十八錢
郵税共
發行所　福島縣石城郡内郷村字宮下四二　内郷村報社
編輯發行兼印刷人　福島縣石城郡内郷村字本町二番地　大内民惠
印刷所　福島縣平市一丁目二九　平活版所